

## 北京日記

李 妍焱 (駒澤大学)

この日記は、駒澤大学の李妍焱が、2009年度4月1日からの在外研究期間中に、滞在先である北京のリアリティを、日記形式でできるだけ誇張も隠蔽もせずに、ありのままお届けするものです。

4月5日

### 「何でもあり」の地域

北京は4、5日前と打って変わって、現在気温は27度、一気に冬から夏に突入しました。空気は依然としてあまりよくありません。外に出て歩いてもとくに感じませんが、家の窓から遠くのビル群を眺めると、よく晴れているにもかかわらずぼんやりとしか見えないことから、空気が汚れていることを実感しています。

私は北京日本人学校のすぐ近くの「小区(団地)」に住んでいます。欧米人と農民工が混ざって居住している、大変興味深い地域で、夕方にはいつも近所を「探索」しています。マンションを出て右に曲がると、欧米人のお金持ちが多く住む高級マンションと、彼らをターゲットにした数々のおしゃれな店舗があります。高級マンションのゲートのチェックが厳しく、物々しい雰囲気でした。5才ぐらいの物乞いの女の子がいつもその一角にあるパン屋さんの前で待ち受けています。とてもかわいい子で、娘に彼女の状況を説明するのに大変苦労しました。そして、お金を与えるべきかどうかの問題についても、すっきりとした回答を娘に返すことはできませんでした。

マンションを出て左に曲がると、昔ながらの団地が所々残っており、この近くで家政婦をしたり、元々ここに住んでいた農民であったりと、農民風の人たちが多く出歩いています。スーパーの感じも明らかに中国人向きのものであり、30分ぐらい歩いたところには、格安の朝市もあります。しかし、その朝市のすぐ近くに、また別の高級マンション群がそびえ立っています。

私が住んでいるマンションには、それほど金持ちではなさそうな欧米人と、家政婦らしきフィリピン人と、やや金持ちそうな中国人と、家政婦らしき農村女性、そして片方の親が中国人である日本の家族が数世帯住んでいます。地元の不動産屋は中国語と英語でしか対応できないことと、日本人は大概慎重で、安全を最優先するため、このような地元にあるマンションになかなか住まないことが、一般的な日本人家族がいない理由だと思います。

ちょっと足を伸ばすと、韓国人街(望京地域)もあります。そこにはウォルマートやカルフル、そしてイトーヨーカ堂などの外資系スーパーも集まっています。ちなみに、イトーヨーカ堂の中国名は「華堂」です。なかなかしゃれた名前です。カルフルは「家楽福」なので、発音も似ているし、見事な訳だなあ

と、感心してしまいます。

まさに何でもありの地域で、ここでの暮らしを思うと、わくわくしてしまいます。

4月9日

### 北京日本人学校と北京の日本人的生活

娘の日本人学校生活が今日から始まります。今日は入学式だけなので、午前中で帰ってきます。安全上の理由から、毎日の送り迎えが義務づけられています。

北京日本人学校は、四環路（中心から数えると四つめの環状道路）の北東部に位置しています。小学部と中学部があります。ほんの10年前までは「とんでもなく郊外」とされるこの地域ですが、現在は韓国人街の「望京」、一大商業地域である「燕莎」に挟まれ、欧米人が集中する「麗都地域」に隣接していることから、開発が進み、様々な人が集まっています。1976年開校当時、北京日本人学校はわずか17名の生徒しかいませんでしたが、1982年には100名、88年には300名を超えました。しかしバブルの崩壊を受けて90年からいきなり生徒数が310名から245名に減少し、94年にやっと316名まで回復しました。その後は増加の一途をたどり、2005年には前年度より120名ほど増加して577名に、そして2008年は688名でした。今年度は金融危機の影響もありやや減少し、650名となっています（『学校要覧』と『保護者会資料』による）。日中関係の進展と世相は、生徒の人数に見事に反映されているようです。

もうすぐ開門なので、親たちが門のそばで待っています。高い塀の上に鉄条網が張られた日本人学校の向かい側には、高級料理屋が何件も立ち並び、オーナーらしきイタリア人風の中年男性が、車の後部座席からいそいそとビールを取り出していました。日本人学校の前の道路は行き止まりとなっているため、学校関係の車両と、向かい側の高級レストラン関係の車両以外はほとんど車が入ってきません。クラクション音の絶えない北京では、珍しく静かな一角となっています。

学校関係の車両で最も目を引くのは、日本人が集中して入居している「公寓(サービスアパートメント)」の送迎バスです。「光明公寓」「東苑公寓」「酒仙公寓」「麗都公寓」など、公寓の名前入りのバスがそれぞれ所定の場所に駐車しており、専従の運転手さんと公寓のサービススタッフらしき人が暇そうに子供たちの帰りを待っています。他にも、住宅を仲介した不動産会社のバスが何台か止まっています。北京の日本人向けサービスが如何に進んでいるかを、ここではっきりと見て取れます。日本人が如何に固まって居住しているかということも、ですが。

家を探していたときのことが頭をよぎりました。日本語で検索すると、日本人向けに専門的にやっている不動産屋が登場してきます。送迎バスを出している公寓がすべて紹介されていました。公寓は、家の中の設備が揃っているだけでなく、構内にスポーツジムやプール、テニスコート、子供の遊び場など贅沢なサービス施設も揃っており、日本語のできるスタッフ付きお買い物バスまで無料で走っています。「東苑公寓」と「酒仙公寓」は、2LDK以上なら最低でも月に15,000元（約20万円）の家賃がかかります。日本人入居率はなんと100%！お見事です。「光明公寓」はもっと世間離れしており、ゴルフコース付きの広大な敷地内に、全室120平米以上の戸建てが160棟、家賃はなんと月28,000元（約40万円）からとなっています。ここでは日本人入居率が85%！さすがです。

「北京駐在になるんですか？大変ですね」と、軽々とってはいけません。公寓暮らしに慣れた皆様が東京の自宅に戻ると、大多数はきっと「夢から覚めてしまった」感に襲われるのでしょうか。公寓様さまです。

ちなみに家賃自腹の我が家は当然、公寓とは無縁の暮らし方をしなければなりません。3LDKを月4500元(約65,000円)で借りました。金融危機と円高のおかげで助かりました(汗)。この地域ではこの値段は「まあまあ」だそうです。トイレ兼浴室の換気扇は故障していて動かなくても、ガスレンジの一口はどうあがいても火がつかなくても、シャワー室のドアはゆがんでいてちゃんと閉まらなくて、ドアホンは故障していて通話できなくても、網戸は壊れていてうまく閉まらなくても、「40万円!」と比べると、大して問題ではありません。自力で直します。

北京では、日本人的生活をしようと思えばほとんどのものが手に入ります。「華堂(イトーヨーカ堂)には当然日本から輸入した商品がたくさん並んでいます。食品コーナーでも日本の調味料がそのまま売られています。主に中国人が使うスーパー「ロツテマート(中国語名は「楽天瑪特)」でさえ、日本の食品や調味料が置いてあります。値段は日本に比べると2、3倍、4、5倍とずいぶん高めですが、日本の醤油、みりん、味噌、ドレッシング、中濃ソース…これでもかというぐらい何でも揃っています。さらに値段がお手頃なのは、通販です。事務用品メーカー「KOKUYO」がネットショップを開いており、18:00までに注文すれば翌日に配達してくれます。文具などの事務用品はもちろん、ネピアの箱ティッシュからマヨネーズ、パスタソース、コシヒカリとあきたこまち、「銀座カレー」、即席味噌汁の「あさげ」と「ゆうげ」、ミニサイズクッキーが、日本の包装のままで、日本と同じ価格で売られています。スーパーではなかなか手に入らない「無糖」の麦茶や緑茶も手に入ります(中国ではペットボトル入りのお茶のほとんどに砂糖が入っています)。

国際都市、北京です。

「北京駐在」を命じられたら、会社が家賃を負担してくれるというなら、「しめた!」と小さくガッツポーズをしましょう。でもお子さんも一緒なら忘れずに持ってきたほうがいいものがあります。小学校で使う「お道具箱(箱だけ)」と、お弁当と一緒に持っていく「箸箱」です。お道具箱はお店では決して見つけられません。箸箱は、「華堂」でなら1,200円ぐらいで日本からの直輸入品を手に入れられます。涙が出ますよ。

4月10日

### スケールが違う

北京の街を綿状のポプラの種が飛んでいます。気温も毎日のように25度を超えているので、改めて温暖化を実感しました。新聞記事の紹介によれば、ポプラの木が北京中に植えられたのは建国後の都市緑化計画によるもので、当時は雌の木と雄の木の区別を「うっかり考えなかった」らしく、種を飛ばす雌の木がかなり植えられてしまったそうです。近年は雄の木に植替えたり、注射で雌の木を雄の木に「性転換させている」という、涙ぐましい努力が成されているようです。厄介者扱いされる「綿種」ですが、一方では「風物詩」として市民に親しまれています。ポプラの後は、日本のガイドブックなどでも有名な「柳絮

が舞うので、「気温 25 度の中の吹雪」は、合計 20 日間以上にわたるそうです。

そんな「吹雪」の中、中国屈指の名門、清華大学に行ってきました。今回の在外研究は、清華大学のご協力なしでは実現できませんでした。中国初の NGO 研究所が、この公共管理学院内にあります。

遠回りとは分かっているながらも、地下鉄 13 号線に乗ってみました。「望京西」駅から「五道口」駅まで 8 駅で、時刻表を調べると 25 分間の距離となっていますが、駅間が遠いためか、あるいは 13 号線が通る地域には未開発の広大な土地が多く残っているためか、とても長く感じました。

途中の駅から乗ってきた若い男性が突然私の隣に座っている夫に話しかけました。「同僚は心臓の鼓動が早くて具合悪いと言っています。席を譲ってもらえませんか？」中国語があまり分からない夫は、言葉が分からない以上に、なぜ知らない男が真つぐ自分のところに来て話しかけているのか理解できならしく、ぼかーんとしていました。慌てて私は男性に事情を説明し、「私が譲りましょう」と話しました。すると私が動き出す前に、夫の右側に座っていた青年が素早く立ち上がり、「どうぞこちらに」と席を譲りました。一件落着でしたが、「あんなに大勢が座っているのに、なぜ僕なの？」という夫の疑問に答えるのに苦労しました。

わかりやすくまとめるところです。病気の同僚と一緒に乗ってきた男性は、最初に目に入った座席の方向に来たのですが、一番ドアに近いところに座っているのは私(女性)なので、その隣に座っている男性(夫)に話しかけたわけです。中国人にしてみれば、当然至極の行動です。席を譲ってほしいときに、当然「弱い」女性ではなく、男性に頼むのです。公共交通機関では、高齢者はもちろんのこと、小学校高学年までの子供でも席を譲ってもらえる確率がかなり高く、時々疲れた顔をする若い女性でも、男性に席を譲ってもらえます。私自身、中国語が達者な中東出身者風の男性から席を譲られそうになった経験があります(もちろん断りましたが)。

日本では、電車で知らない人に声をかけられることはほとんどありません。源義経人気やアンチ巨人などの現象から「弱者最優先」の国民性を指摘する声もありますが、東京の電車では、確実に「席を譲る確率」が低いと言えます。そんな日常に慣れた人間にとって、確かにいきなり電車で声をかけられることは、困惑することに違いありません。

「あなたは優しい顔をしているから声をかけられるのよ」と、とりあえず夫に言っておきました。北京は大都会ですが、まだまだ人情がたっぷり残っている街です。

やっとの思いで清華大学に着きました。事務手続きのために公共管理学院から歩いて国際交流担当の部署に向かいました。しかし、歩いても歩いても、20 分ぐらい歩いても到着しません。途中にはおそろいのジャージを着た遠足らしき子供たちが、お菓子を食べながら見学している姿を多く見かけました。清華大学の前身は 1911 年に設立された米国留学予備校でしたが、1925 年に大学部が成立し、1928 年に「国立清華大学」に改名されました。1909 年に建築された「二校門」をはじめ、大講堂や科学館、清華学堂などの欧風建築の他に、伝統的な北京建築である四合院や庭園などが多く保存されており、北京の小学生の格好な「遠足先」となっているようです。

娘の社会科の補助教科書で読んだのですが、北京の面積は日本の四国全体とほぼ同じだそうです。大学の構内を歩いただけで足が折れそうになるのも納得です。

雌の木と雄の木の違いなんて、うっかり思い出せなかった、というのも、このスケールの大きさによるのかもしれませんが。常にこれだけの広大さに身を置いている人間にとって、細かいことにこだわるのは、かえって不自然でしょうね。「なぜ僕だけに声をかけるんだ」なんて、きっと気にしなくていいですよ、我が老公（夫）。

4月15日

### 自由

今日はとても空気が澄んでいて、北京に来てから初めて、家の窓からとても遠くの高層ビルまで見渡すことができました。遠方の山まで見えたので、なんだか得した気分です。

昨日から、朝、娘を学校に送った帰りに、公園に寄るようにしています。日本人学校と自宅の間に「四得公園」という大きな公園があります。大変きれいに整備されており、入園料も無料のため、地域に住む様々な人たちがよく訪れているようです。

一週 900 メートルの環状歩道は、黙々と健康のためにウォーキングやジョギングに励む人たちがいっぱいになります。半袖と半ズボン姿で走る長身の白人男性、ベビーカーを押しながら散歩する体格のいいインド人風の女性、体にフィットするカラフルな服装でがやがやおしゃべりしながら歩く若い女性たち、今時人民服に人民帽姿の農民風のおじさんたち・・・常連らしきおばあちゃんたちは互いに挨拶しながらすれ違ったり、この後どこに野菜を買いに行くか相談したりしています。

日本では、グループで固まって太極拳を楽しむ風景が良く想像されますが、実際は、銘々がそれぞれ思い思いに、公園のあちらこちらで好きなようにしている、という感じです。

木のそばには一人で大きな声を出して、発声練習をしている中年女性、整備された数々の広場には京劇の動作を繰り返す女性、笛を吹いてるおじさん、そしてなぜかずっと同じ姿勢で直立不動のおばあちゃんがいったりします。道ばたの空き地にはコミカルに腰を回し続けるおばあちゃん、運動器具のところには分類のしようもない老若男女、5、6 台ある卓球台では勝負に熱中するおじさんたちがいます。他にも今朝は木に登ってポーズを取り、写真を撮ろうとしているカップル（モデルさんやなにかの撮影ではありません）がいました。そして、毎朝のように木の茂みに囲まれた空き地で手足を絶えず動かしながらも雑談を続ける2人のおばあちゃん、そのそばを、ニワトリたちが、悠然とお散歩を楽しんでいます。

それぞれの「傍若無人ぶり」が、風が吹き抜けていくような、自由な心地よさを感じさせてくれます。

日本で暮らしていると、なかなかこの自由さを味わえません。人の目を気にすることなく、好きなことを好きなだけやる。「遠慮を知らない、わがまま、強引、図々しい、騒々しい・・・」。中国人に対する日本人のイメージは大体こんなものですが、まあ、そのおかげで中国では人々は自由でいられるのですね、きっと。

ニワトリの出所はまもなく判明しました。公園の一角に、農家らしい家屋と庭がありました。開発の名残でしょうか。推測ですが、公園内の整備の仕事をしているため、家が残されたと思われます。近代的に整備された公園の中、しかも開発が終わった広い道路と高層ビル群に囲まれているのですから、その中に、昔から住んでいるらしき農家が一軒。理屈で考えると不合理に他ならないでしょうが、今の中国ではこれ

がむしろ自然の姿かもしれません。

公園の入り口は駐車場です。2人連れの若い女性が人目をばはかることもなく、誰のかわからない車の前でモデル風にポーズを決めて写真の撮りっこをしていました。いつかこんな車を自分のものになりたい、という思いを胸に抱きながら、かもしれません。

4月21日

#### 規制と規制されない人々

遠くの山が見えたのは、北京に来てから今日で2回目。空気が澄んだからというよりも、風が強くて粉じんがすべてどこかに吹き飛ばされたからかもしれません。北京では毎日のように空気汚染指数が公表されます。汚染物の濃度を数値化したもので、50以下は一級の「優」、すなわち「素晴らしき空気」、50～100は二級の「良」、「まあ悪くない」という指数。100～200は三級で「軽度の汚染」を意味し、200～300は四級で「中度の汚染」、300以上は五級で「重度の汚染」になります。

今日は間違いなく「優」の空気でしょう。

空気と言えば、オリンピックの期間中に行われた車の規制は、現在も形を変えて継続されています。オリンピック期間中は、自家用車に対して奇数と偶数に分けて交替で走ることが許されていたが、現在は毎日ナンバーの下一桁の番号が2つずつ規制されています。交通情報を伝えるテレビ番組では毎日のように「今日規制されるナンバー」が発表されています。しかし、この規制はどの程度守られているのか確認のしようがありません。もの好きな私はタクシーに乗って四環路を走りましたが、ナンバーの最後の1桁を注意深く観察したら、すべての番号を見つけることができました。

「中国では政策と制度は違う概念だと思う。政策は紙上にとどまるもので、人々が本当にその通りに実行してはじめて制度になる。今の中国の問題は良い政策がないことではなく、良い政策が制度として成り立たないことなのよ！」

先日 NGO で仕事をしていた友人がこんなことを言っていたことを思い出しました。確かに、ルールやマナーを守らないことで知られる我が国民。交通事情とペット飼育のマナーを見れば何よりも一目瞭然です。

中国に来たことのある日本人なら、誰もがきつと横断歩道を渡る歩行者に突っ込んでくる車に仰天し、血液が逆流しそうになる経験を持っていると思われます。特に巨大な路線バスが「車譲行人（車が歩行者に譲りましょう）」とスピーカー音を流しながら突っ込んでくるときには、そのバスのおしりを蹴飛ばしたくなるに違いありません。「歩行者優先」はあくまでも交通法規、守る人なんてほとんどいません。何千年にわたって我が国民に刻み込まれた「強者優位」の思想は、交通法規なんぞで変えられるわけがありません。強者にこびを売り、弱者をいじめ、裏で強者を罵倒することで自慰するという「阿Q精神」は、グローバル化の時代だろうとなんだろうと健在のようです。魯迅先生が見たらきつと泣くことでしょう。

「狗患（犬による災害）」も実に耐え難き現象です。豊かになった北京人はペットを飼うようになりました。良いことです。しかし歩道を歩くときはくれぐれも注意しましょう。必ず舗装された歩道のど真ん中を歩くようにしないと、道の端に遺棄された「糞」どもにやられてしまいます。北京っ子の犬の飼い方

は「放し飼い+毛を刈らない」、です。もじゃもじゃに伸びた分厚そうな毛に包まれた犬どもが、リードもつけずに自由に散歩しています。首回りの毛があまりにも伸びていて、ライオンみたいな顔になっている犬（チャウチャウ犬？）を見たときは吹き出しそうになりました。これでは、リードのつけようもないのかもしれない。

『北京市養犬管理条例』および『北京市養犬管理規定』は 2006 年 11 月からすでに公表、実施されているはずですが。条例では、犬の散歩には必ず成人者がリードをつけ、養犬登記証も携帯の上で出かけるなければならないこと、そして犬の排泄物についてはその場で清掃しなければならないことを規定しています。違反者に対しては、城管（都市管理行政）が罰金を課すことになっています（排泄物を片付けない場合は罰金 50 元）。

マンションのエレベータに「犬の散歩のマナーを守りましょう」の張り紙がありました。「城管」はやはり当てにならないようです。その上に誰かが大きく「賛成！」と書いていました。気持ちは分かります。しかし、これで状況が劇的に改善するはずもなく、諦めるしかありません。

我が政府はしつこく「ルールづくり」と「管理」に心血を注いでいます。人治から法治への転換を実現するには、「法律の健全化」が重要だと述べる学者も多いようです。しかし、法律の成立から「法治」の実現への道はあまりにも遠いように感じます。人々の「法」に対する意識が変わらない限りは…

4月22日

#### 便利！…ですが…

北京での生活はあっという間に一ヶ月が経ってしまいそうです。大好きな魚肉ソーセージが、気づかないうちに誰かに一口かじられてしまった気分です。「なんでちゃんと見ていなかったんだろう」という悔しさと、「かじったのは誰だ！」という恨めしさと、「残りをじっくり味わって食べなければ」という緊張感と、でも、「できるだけ食わずに残しておきたいなあ」という欲。そんなふくざつ～な気分です。

ポプラの木から飛ぶ綿毛もだいぶ減りました。今度は、綿毛を飛ばした元凶である種のさやが、やや赤褐色に変色して道ばたにいっぱい落ちています。長さが 10 センチほどの柔らかい茎にびっしりと米粒大の種の袋がくっついていて、その袋が破けています。子供の「毛虫」と呼んでいたことを思い出しました。もともと、いまでは落ちてきた「毛虫」はすぐに清掃員にきれいに片付けられます。

北京の道が格段にきれいになったのは、清掃員の大量動員による人海戦術と、あちこちに置いてあるゴミ箱のおかげだと思われます。アイスを買えばすぐに包装紙を捨てられるゴミ箱が見つかるなんて、便利になったものです。東京では少なくとも次に通るコンビニまで持っていなければなりません。

便利になったのはもちろんゴミ箱だけではありません。北京ならではの便利さもあります。その一つは、「小区（団地）」の「物業公司（管理会社）」です。近年多く開発された団地では、大体は開発業者の息の掛かった管理会社が指定管理会社になります。不動産購入者で構成される「業主委員会（オーナー委員会）」も、自治組織と言いながら、管理会社の指揮の下で設立されることが多いようです。開発業者の開発行為や団地管理に大きな問題が生じない限り、「業主委員会」は実質的に機能することは少なく、団地の公共事業は管理会社によって仕切られることになります。

私が入居したマンションの地下一階に、団地の「物業公司」が入っています（団地と言っても、建物は二棟しかありません）。それだけではなく、そこで仕事をするスタッフらしき人たちが、地下一階の部屋で生活しているように見えます。団地の構内には「小食堂」と呼ばれる彼らの食堂もあります。「物業」は様々な機能を担っています。団地の構内の緑地や共用部分の清掃と保全だけではなく、入居者のニーズに応じて様々な仕事をしています。書留や荷物の受け取り、室内の各種設備の修理はもちろんのこと、ミネラルウォーターの宅配、家政サービスの紹介、子供の習い事の紹介、近所のレストランのチラシの配布、ファックスやコピーサービスに至るまで、実に至れり尽くせりです。

物業が玄関に設置した「電話型万能公共料金支払機」も、ありがたい機械です。電気料金とガス料金、電話料金、公共交通のカードのチャージまで、すべて銀行のキャッシュカードで支払い可能となっています。電気には電気カード、ガスにはガスカードがあり、先にそれらの「行業カード（業種カード）」を通し、購入したい電気やガスの量を入力し、銀行カードを通して暗証番号を入力すれば完成！最初にガス料金の支払いに使ったときは感動しました。

北京では、このようなプリペード式が多いようです。携帯電話、電気、ガスがほとんど「先払い」形式で、メーターで数字を確認し、なくなりそうになったら補充しなければなりません。この機械は各銀行にも設置されていますが、やはり自宅マンションの玄関にあるのは便利なことこの上ありません。

早速私も物業からミネラルウォーターの配達をお願いしました。「飲水機」を購入し、「ミネラルウォーター」入りの大きなボトルを届けてもらい、それを逆さまに電気を通した飲水機に装着すれば、冷たい水も温かい水もご注文通り。

わくわくしながら最初のボトルを届けてもらいました。19 リットル入りなので相当な重さです。物業のおじさんは鼻歌を歌いながらそれを台所まで転がし、飲水機のそばに置きました。蓋を取り中蓋に穴を開けなければ、逆さまにしても水は出てきません。「あっ、はさみならありますが」と、穴を開ける道具を心配する私をよそに、おじさんは油まみれの仕事着のポケットからがちゃがちゃとなんかの鍵を取り出し、慣れた手つきで鍵を一気に中蓋に突き刺し、ぐりぐりっと穴を広げ、壁に水をはねさせながら飲水機にぽこっと、ボトルを装着しました。鮮やかな手さばきでした。

「わざわざ一元高いミネラルウォーターにしたのに、その鍵でぐりぐりと穴を開けるなんて・・・その穴経由で流れ出る水を我々が飲むのですよ・・・」

もちろんそんなことは言えません。

私の「ありがとう」にも答えず、おじさんはガターンとドアをしめ、闊歩して帰って行きました。

10 ボトル分のお金はすでに払ってあります。10 ボトルを買うと、1つお負けするとの口車に乗ってしまつて・・・おじさんの鍵のにおいがかすかにする水を、これからも私たちは飲み続けるのです。

でも、公共料金支払機の功績は否定できませんぞ。今日は電気料金の支払いに挑戦しました！・・・「電気料金は北京銀行のキャッシュカードしか使えません」の表示が出るまで、私はくじけませんでした。中国銀行のカードしか持っていない私は、何キロも先の北京銀行に行ってカードを作らなければなりません。

本当に便利になるには、あとほんの少しなんですよ。

4月24日

### 貧乏人でも金持ちでも消費できる街

今日も北京はよく晴れています。日本ではよく空気の汚れている北京の様子が放送されますが、実際はさほどでもなく、最近は特に青空の日が多く、遠くまで見渡せることも多いです。

三里屯 Village というしゃれたショッピング街に行ってきました。日本人建築家・隈研吾がデザインした話題のビルで、ユニクロをはじめ、Macintosh のアップルショップなどがあるので、われわれにはとりあえずなじみやすいところですよ。もともと住宅街でしたが、大使館街に近いということで、90年代の末から外国人向けのバーが多数開業し、英語の看板が多いちょっとした異国情緒を漂う一角となりました。三里屯 Village の開業でますます外国人率が高い地域となったわけです。

地下には結構良さそうな映画館があって、チケットがなくても座れるベンチソファがあり、飲み物も買えるので、買い物の休憩にはもってこいの場所です。欧米人や日本人なら、たぶん心地よいと感じるショッピング街だと思います。もちろん、お値段もまったく同じ、もしくは日本よりも高め、ということになりますけど・・・

北京は本当に物価が高い街です。今年1月に公表された国際人材調査会社E C Aインターナショナルの「世界の物価調査」によれば、北京は香港を抜いてアジアで5番目に物価の高い街になったと言います(香港ドルに対する現高の影響もあると思われますが、上位4つの街は東京をはじめとする日本の都市です)。しかし、面白いことに北京では、価格の設定が非常に合理的というか、貧乏人でもお金持ちでもそれぞれ自分に合う買い物ができるようになっています。

基本的には、市場や小さな八百屋さんだけでなく、大規模なスーパーでも、ものすごく安く売られている野菜があります。ほうれん草一束1元だったりします。牛乳も袋入りの一回分は大体1.5元、お米も小麦粉もお菓子類に比べれば格段に安いです。

つまり、飢え死にしない程度の食料を確保するには、そんなにお金がかからないと思われそうです。

しかし、少しまともに消費しようとする、ほとんど日本と変わらない値段になったり、日本よりも高い値段になったりします。

同じ野菜でも、メーカー品となると(本当にいいかどうか別にして)、4-5倍の値段になり、ピーマン2個で5元、キャベツ一つで8元だったりします。同じようなリンゴでも小さな八百屋さんでは500グラム4元で、大体4個で10元ぐらいになります。スーパーですと500グラム8元近くなるので、倍になります。

卵もほぼ日本と同じ値段です。

シャンプーや洗剤などの日用品はもっと値段の差が激しく、普通にスーパーに置いているものはほとんど日本と変わらない値段か、日本より高いです。ゴミ箱やスリッパ、トイレトペーパーなども、安いものを買うためには朝市などの市場に行かなければなりません。すると、へんてこなカートンものの柄が印刷された商品が手に入ります。

日本では、中国の都市住民の平均月収、年収の数字が報道されたりしますが、そんなものはなんの参考にもならないのではないかと思います。ここでは、収入の格差があまりにも激しく、平均を取っても意味

がありません。それぞれが自分の収入に見合う消費をしているわけです。

貧乏人はとりあえず食べられて、お金持ちはとんでもなく贅沢できる。北京はそんなところですよ。